

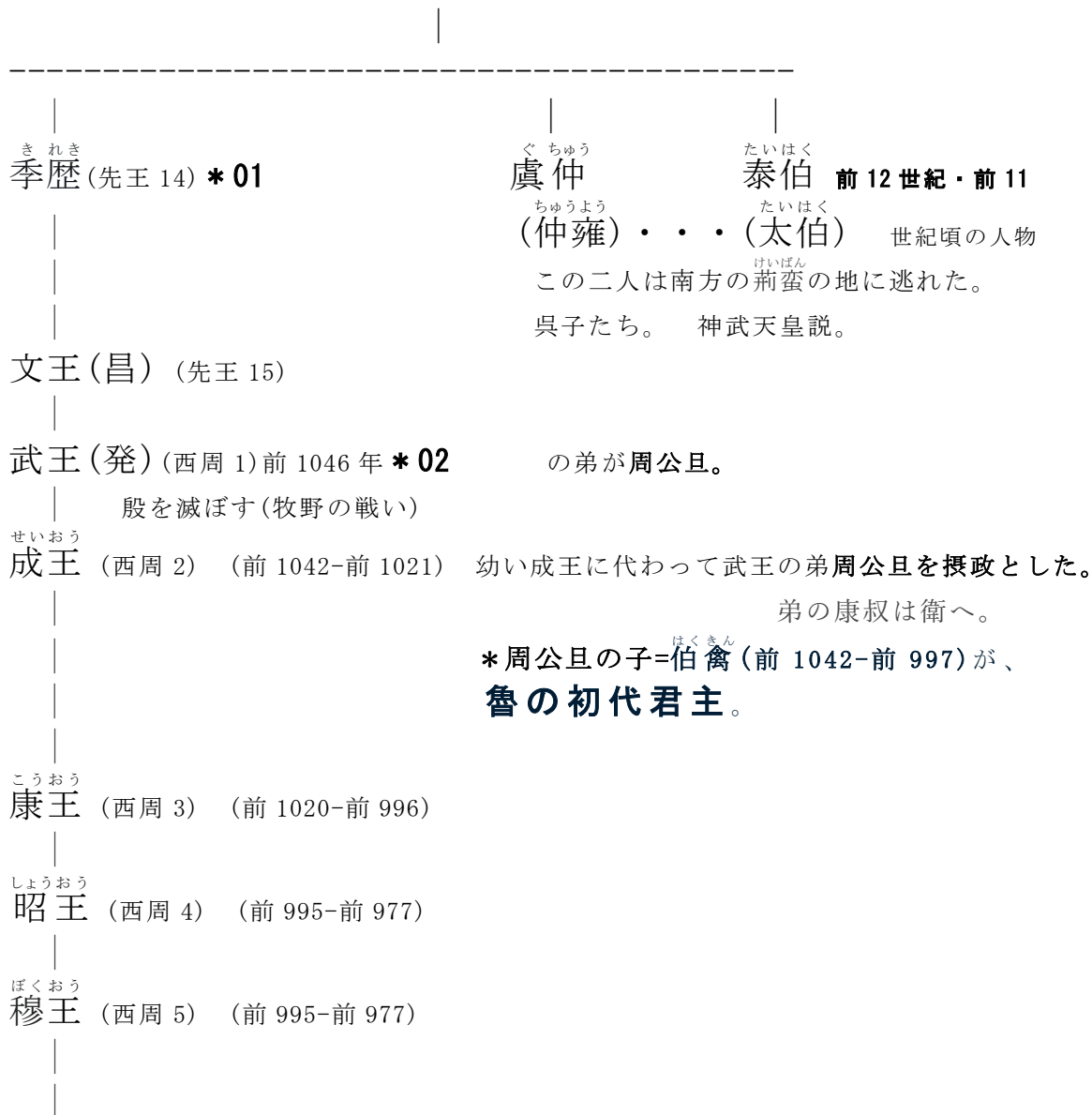
周の始祖から

伝説の始祖は、周成立(前 1046 年)より大分前の「^{こうしよく}后稷」であり、舜につかえて農政に功績があった。

「^{ここうたんぼ}古公亶父」(13代)の時代に[周]に定住した。[周]は殷の外地に位地する方国の一つとされていた。

始祖「^{こうしよく}后稷」(先王 1)
(公叔祖類の子。舜に仕えて農政に実績があった)

^{ここうたんぼ}古公亶父(先王 13)(周初代武王の曾祖父。周に定着した。)



けいおう
携王 (西周 12 最後) (前 770-前 750)

共和があつたり、紀元前 750 年、恵王は晋の文侯によって殺害された。
周が王を失って 9 年 (紀元前 741 年)、邦君諸侯たちは周に朝見しなくなった。
晋の文侯は少鄂に平王を迎え、これを京師に擁立した。3 年 (紀元前 738 年)、
平王は東遷して成周にとどまった。

へいおう
平王 (東周 1) (前 770-前 720)

赧王 (東周 25) (前 314 年-前 256 年) 前 256 年西周滅ぶ

その後も昭文君の東周は 7 年間存続したが、前 249 年、秦の
呂不韋によって攻め滅ぼされた。前 249 年東周滅ぶ

前 221 年 秦中華統一

[* 01]

季歴 (14 代) の息子・昌 (後 15 代の文王) が誕生した時瑞祥が起きた。季歴の父の
古公亶父 (13 代) は、昌に王位を継がせたいと思ったので、昌の父の季歴に王位
を譲りたかった。

それを察した泰伯は、虞仲を連れて南方の荊蛮の地に逃れた。蛮族の断髪文身
(ザンバラ髪でからだに刺青) となって中華には戻らない意思表示をした。

●泰伯の子孫はのちに呉の君主に封建され、孔子の頃には夫差が出て諸侯の盟主
(覇者) となった。ただし、夫差は越の勾踐に攻められ、呉は彼の代で滅びる。
(臥薪嘗胆の故事)。

●兄弟で君主の地位を譲り合う話は、泰伯 (前12世紀・前11) の少しあと、孤竹国
(前1600-前664) の伯夷・叔齊が有名。この二人が譲り合ったため、彼らの間の次
男仲馮が後を継いだ。

周王朝成立と孔子の生きた時代

前 1046 武王(発) 殷を滅ぼす(牧野の戦い) [*** 02**]

西周

前 771 洛邑に遷都

東周の**前半期**、二百数十年ほど、諸侯が覇を争った。この時代は歴史書春秋に因み「**春秋時代**」と呼ばれる。

前 551 年 孔子生誕

中間 **前 513** ----- **東周** 前 771 から秦に滅ぼされ迄 --

前 479 年 孔子没

東周の**後半期**、二百数十年は、周の天子の権威が漸失された。この時代を戦国策に因み「**戦国時代**」と呼ぶ。

前 256 **西周滅ぶ**

その後も昭文君の**東周は7年間存続したが**、前 249 年、秦の呂不韋によって攻め滅ぼされた。**前 249 年東周滅ぶ**

前 221 **秦中華統一**

<余説>

泰伯が呉の始祖だという話は、おそらく春秋時代後半になって呉国の勢いが増し、中原の諸侯と張り合うようになってから作られた虚構だろう。

この伝承は『史記』の「**呉太伯世家**」の冒頭に書かれている。

今に至るまで**もっばらこの『史記』の記述が根拠になっているにすぎない。**

↑ **重要**

『史記』より少し前に書かれたと考えられている『春秋公羊伝』や『春秋穀梁伝』(前507年頃から)では、どちらも呉夫差が出てきて、呉を夷狄(中華ではない)とみなしており、その始祖が泰伯という人だとも、ましてや彼が文王の伯父だとも書いていない。司馬遷は少々あやしい。

三国時代の魚豢の著『魏略』はのちに散逸したがその引用として唐代の『翰苑』に倭国は呉太伯の子孫だとする記載が見える(なお、『翰苑』も散逸していて、巻30だけが日本の太宰府天満宮に写本(国宝に指定)が保存されており、たまたまそこにこの記述がある)。『翰苑』の倭国の条に『魏略』に曰くとして「その旧語、みずから太伯の後と謂う」

詩経 詩経に収録されている詩は、西周の初期(紀元前11世紀)から東周の初期(紀元前7世紀)にかけて、主に周の東遷前後に作られたと考えられています。
(前1180~前650 勝手な推測)

史記 中国の前漢の司馬遷が著した中国最初の通史で、紀元前91年頃に完成したと考えられています。司馬遷は、五帝の黄帝から前漢の武帝まで、およそ3000年の歴史を記述しました。
(前202~前91 勝手な推測)

泰伯の子孫が倭国(神武天皇)であるとの記載の有無

① 前507年-前420年
『春秋公羊伝』

記載なし

② 前 507 年-前 420 年

「しゅんじゅうこくりょうでん」
『春秋穀梁伝』

記載なし

少なくとも前漢宣帝期(前 74 年-前 49 年)には現在の形に纏められていることが解っている。

③ 前 92~89 年

『史記』(司馬遷)

記載あり

中国前漢の武帝の時代に司馬遷によって編纂された歴史書である。

紀元前 92~89 年に至って完成した。

前漢の武帝は、紀元前 141 年から紀元前 87 年まで在位。

前 141-----前 92-89 -----前 87

武帝

史記完成

武帝

④ (280年(吳の滅亡) - 297年(陳寿の没年)の間)

『三国志』の魏書東夷伝倭人条(いわゆる魏志倭人伝)

(日本との関りの話のはじまり) 記載あり

「男はみな黥面文身している」と刺青の風習を記録している。
こうしたところから倭は吳や越の風俗習慣に似ているという考え方が定着し、やがて倭の王も泰伯の子孫だとする説が生じる。

⑤ (220年-280年)

三国時代の魚豢の著『魏略』

記載あり

のちに散逸したがその引用として唐代の『翰苑』(660年以前)に倭国は吳太伯の子孫だとする記載が見える(なお、『翰苑』も散逸していて、巻30だけが日本の太宰府天満宮に写本(国宝に指定)が保存されており、たまたまそこにこの記述がある)。

『翰苑』の倭国の条に『魏略』に曰くとして「その旧語、**みずから太伯の後と謂う**」とある。これを信じれば、三国時代(日本では卑弥呼の頃)には自分たちでそう言っていたことになる。これが現在たどれる最も古い史料である。

- ⑥ (439-589)
『^{そうしょ}宋書』や『^{なんせいしょ}南齊書』(南朝時代に編まれた) **記載なし**
南朝(かつての呉国の地)ではこうは言われておらず、
唐代になってから『魏略』の記述が利用されるようになったと考えるこ
とも可能である(ただし『隋書』にも見えない)。
- ⑦ (581-618)
『隋書』 日出処の天子・・・ **記載なし**
- ⑧ (618-907)
『^{しんじょ}晋書』や『^{りょうしょ}梁書』(唐代に編纂) **記載あり**
^{かんえん}唐代の『^{かんえん}翰苑』と同じ表現が見える。

日本① (1300-1375) **記載あり**

十四世紀、日本の南北朝時代初期に活躍した禅僧^{ちゅうがんえんげつ}中巖円月(1300-1375)で、
彼はこれを信じていたらしい。中国留学経験がある。

日本② (1336-1392) **無**

一方、同世代の^{きたばたけちかふさ}北畠親房は『^{じんのうしやうとうき}神皇正統記』においてこの説を**紹介しながら**
も、荒唐無稽と批判している。「何故なら古事記や日本書記には書いて
いないだろう」(1336-1392)
神代から延元4年/暦応2年8月15日(1339年)の後村上天皇踐祚までを書く。

日本③ (1402-1481) **無**

十五世紀、室町時代前期の公家^{いちじょうかねよし}一条兼良(1402-1481)は『^{にほんしよきさんそ}日本書紀纂疏』
でわざわざこの説に言及して批判している。

親房や兼良の事例は、批判者側も触れざるを得ないほどこの説が広まっていたことを窺わせる。円月は中国留学経験があり、彼と同じく中国(元・明)と往来していた禅僧たちの間に浸透していたのだろう。当時、禅僧は御用学者として幕府(武家政権)を支えており、公家の親房や兼良が反対しているのは象徴的かもしれない。

日本④ (1475-1550) だからどうってことない

きよはらのぶかた
清原宣賢

「論語聴塵」抄物（講義ノート）の中に

「齒を黒くし眉毛を抜くのは呉地の俗に似たり」と書き残している。

日本⑤ 二枚舌

記載あり&無

江戸時代になっても徳川将軍家4代にわたる御用学者だった朱子学者

はやしらざん

林羅山が「神武天皇論」でこの説をとっている。 (有) プライベート

ただし彼が幕命で編纂した『本朝通鑑』

無 オフィシャル

は記紀（『古事記』と『日本書紀』）に従い、皇統は中国とは関係ないとしている。

日本⑥

徳川光圀

無

なお俗説としての虚構だが、徳川光圀が『大日本史』編纂を思い立ったひとつの理由は羅山らの呉太伯後裔説を論破を志したことだとされる。

泰伯が皇室の祖先だという説は実証しがたく虚構とせざるをえない。

ただし中国では黥（いれずみ）は罪人の目印だったから、自主的に「黥面文身」していた倭人の風俗を見て中国の人たちが泰伯の故事を連想したであろうこと、それを逆手にとって倭国の使節が「私たちは泰伯の子孫です」と言ったことは納得がいく。実際に長江下流域と西日本とは気候（温帯モンスーン）・植生（照葉樹林帯）が共通しており、（陸稲でなく）水田耕作が始まったのも長江下流域と考えられている（河姆渡遺跡や上山遺）。稲作が（朝鮮半島経由ではなく）ここから日本に直接伝わったとする説もある。呉太伯後裔説は長江下流域から西日本への稲作伝播を伝説上の個人と結びつけて象徴させているとも解釈できるだろう。

藤田東湖の『修史始末』で「一人の怪しげな僧侶が広めた」